

かずさの博物誌

メダイチドリ ～幼げで可愛らしい～

文・写真／成田篤彦



▲休息するメダイチドリ
全長19.5cm。冬羽2008年10月13日 小櫃川河口干潟＝成田篤彦撮影



▲群れで飛ぶメダイチドリ
冬羽 2008年10月7日
小櫃川河口干潟＝成田篤彦撮影

その中の一羽が地面をつついたり、輪ゴムを伸ばすようにゴカイ（海に棲むミミズのような生き物）を引き出した。メダイチ

ないご馳走だからか？」と思った。そのうち、呑みこんで、小走りでも逃げ去った。そのしぐさが「幼げで可愛らしい」と思った。さて、メダイチドリはタリム盆地周辺の山岳地帯（中央アジア）と東バイカル地方、カムチャッカ半島などの海岸地帯の草原や湿地で繁殖する。冬季は東南アジア、ニューギニア、オーストラリアなどに渡っていく。日本では旅鳥として春と秋に現れる。上総では四～五月と七月下旬～九月に出現する。主に干潟や砂浜に集まるが、水田や内陸の湿地に入ることもある。

ドリたちは泥の中を探り、ひとしきりえさを捕ると一斉に群れをなして沖合に飛び立った。話は前後するが、四年前の五月、富津岬に行った。

波打ち際で数羽のチドリとシギがえさを求めてうろついていた。

一羽だけ逃げないチドリがいた。胸のオレンジ色の首輪、頬や額の黒色、大きな眼、とても鮮やか。夏羽のメダイチドリの雌だ。秋のとは大違いだ。カメラをもって背を低くして近づいた。

彼女は「何にしにくるの？」とばかり私の方をちらちら見る。「私を用心しているのか。それにして逃げない。なぜだろうか？」彼女は急に波打ち際を大股で走った。

「あ！何か摘まんだ。ニホンスナモグリだ」。この動物はヤドカリのなかまの甲殻類で、バケジャコなどと呼び釣り餌につかわれる。これは業者が砂浜に水を噴射させて掘り出したが、死んでいるので捨てたものだ。

「ニホンスナモグリが落ちていたので逃げなかったのか？」と思った。

彼女はそれを摘まんで、逆さにして、挟みなおしたりしていた。「何かうれしそうだ。普段は捕れ



▲メダイチドリの雌
夏羽 ニホンスナモグリを摘まむ。
2006年4月30日
富津岬＝成田篤彦撮影



▲オオメダイチドリ
旅鳥 全長21.5cm。メダイチドリよりやや大きく、脚は黄褐色。ゴカイを引き出している。主食は小型のカニ。中央アジアなどで繁殖。東南アジア、オーストラリアで越冬。2008年10月7日 小櫃川河口干潟＝成田篤彦撮影

セイタカアワダチソウの黄色い花を背に干潟の浜辺に腰を下ろした。沖合を眺めると陽炎が立ち、遠くの景色はかすんで見える。ウミネコとカワウが飛び交うだけで何も動くものが見えない。緩やかな風が吹く。秋の干潟はしんと静まり返っててうら悲しい。しかし、双眼鏡で見ると沖合の干潟の滯（みお）や波打ち際でさまざまにチドリやシギが休息したり、えさを探し回っているのが見えた。彼らの背の色は灰褐色で干潟の地面に溶け込んでいた。しばらくすると座っている浜辺の側の滯（みお）まで十数羽のチドリの群れが近づいてきた。大きさはツグミより少し小さい。背は灰色で腹は白。眼が大きい。くちばしは短い。「メダイチドリだ」。

ちなみに、上総にはオオメダイチドリも少ないけれども訪れる。皆さんもシギ・チドリが渡来するかずさの秋の海岸を堪能してはいかがでしょう？

参考文献 千葉県の自然誌本編7